

放射線リスクコミュニケーション



相談員支援センター だより

浪江町 放射線相談員さんに聞きました
住民の方からの相談対応、どうしていますか？

平成 29 年 3 月 31 日に居住制限区域と避難指示解除準備区域が解除となった双葉郡浪江町。浪江町健康保険課放射線対策係で放射線相談員として活動している西垣卓馬さんにお話を伺いました。



—西垣さんは平成 28 年から放射線相談員として活動しているそうですね。解除されてまもなくの昨年 5 月頃は居住人数が 300 人弱だったと記憶しています。本年 8 月末現在で居住者数は 825 人に増えましたが、住民の方からの相談内容について避難指示解除前後で変化はありますか。

解除前から浪江町の放射線対策係の放射線相談員として活動しています。確かに今年の 3 月や 4 月の人口増加が大きかったように思いますが、町営住宅の整備が進んだことが要因として大きいだろうと思います。特に住民が増えた分、相談数は多くなりました。

解除前は D シャトルの読取が多かったのですが、解除後は屋内の空間線量や物品に放射性物質が付着していないか、といった相談が多く見受けられました。内容では D シャトルで測定した個人線量の数値説明をすることが多くなったと思います。あとは帰還を見込む方が自宅のリフォームや清掃等で避難先から通わなくてはならないため往復の線量を知り

たいといったことが多いです。

—屋内の空間線量や D シャトルの線量について相談を受けることが多いということですが、数値をご覧になって高いとおっしゃる方は多いのでしょうか。

線量の高い低いについての受け止め方は様々です。除染をしたのに年間 1mSv を超えているが大丈夫だろうか等の質問をされることは多いです。

—除染の効果がそれほど見られないと感じると被ばくを避けるために何らかの手立てを見いだしたい、という気持ちになる住民の方もいらっしゃると思いますが、そのような場合にはどう対応をされていますか。

実情を丁寧にお伝えし、それでも伝わりにくい場合は健康影響についての話をお伝えしていくことが多いです。ただ、放射線量を含め、震災前と同じ生活を取り戻したいという思いが根本にあるのは間違いないので、その思いを受け止め、町役場の職員として住民の方に誠実に説明することを一番に心がけています。

また、避難先にいらっしゃる住民の方から浪江町に今日行くから測ってほしい、という急な連絡があってもすぐに応えることができるのは、現場にいるからこそその強みだと言えます。

—住民から要望があったとき「丁寧にやってくれる」「頼んだらすぐに対応してくれる」という実感を持たれる対応を地道に行うことが、信頼関係を育てていくのに重要だと感じました。お話ありがとうございました。



第2回 相談員合同ワークショップ 開催のご報告

8月28日（火）いわきワシントンホテルにおいて第2回相談員合同ワークショップが開催されました。昨年12月に行った1回目相談員合同ワークショップでは、関係各所との連携やその連携のために会議等の場を設けることや好事例等の共有が課題として挙げられていました。それらを受け、今回のワークショップでは、後半のグループディスカッションで「①支援センターの活用方法、今後期待したいこと」「②好事例・失敗事例共有」「③相談対応手順・他部署との連携」の3つのテーマで話合うため、前半に関係府省・関係機関からの報告と情報提供、その後4名のパネリストによる各自治体の活動紹介が行われました。



内閣府由良審議官から開会の挨拶のあと、環境省前田参事官から相談員合同ワークショップの設置趣旨についての説明、内閣府原子力被災者生活支援チーム野口参事官から避難指示区域の現状について、ふくしま心のケアセンター渡部業務部長からセンター概況と課題について、資源エネルギー庁奥田廃炉・汚染水対策官から福島第一原発の廃炉の進捗状況について、また、相談員支援センターの活動内容について杉浦理事長から、それぞれ説明がありました。その内容を受け、浪江町、広野町、川俣町の相談員等による4名のパネリストに各市町村の状況説明として登壇していただきました。

浪江町健康保険課の西垣放射線相談員からは「浪江町における放射線相談事例」と題し、住民からの相談対応の好事例と失敗事例について話がありま

した。

室内が放射性物質によって直接汚染されていると
思っていた住民の方からの相談対応として、空間線
量を一緒に測定するほか、室内の汚染と屋外から
やってくる放射線による空間線量の上昇には関係が
ないことを示すためGMサーベイメーターによる
測定も行い、断片的な情報を統合する手助けの説明
が好事例に繋がった、というエピソードや、健康被
害を心配している方に対し、科学的な情報を提供し
ようと対応したところ激高されたエピソードから、
科学的な説明にこだわるより、まずは話を聞いても
らいたい住民の方の気持ちを汲み、丁寧に聞くとい
う姿勢もまた重要ではないか、という失敗事例の反
省より、「放射線相談は説得ではないこと」「放射線
知識の前提となる情報を把握し相談員が言葉で整理
し、一緒に考えることで相談者の納得感を引き出す」
「(相談員は) 相談者の考えを整理する補助者である
こと」とまとめられ、真剣にメモする参加者もいま
した。

広野町放射線相談室の鈴木前室長と星現室長から
は、これまでの活動実績にあわせ、どのように相談
員支援センターを活用してきたか、事業の引継ぎの
方法について、異動や退職によって相談室の活動に
切れ目や支障が出ないようにする方法について話が
ありました。



川俣町原子力災害対策課の戸川生活相談員から
は、ヒアリングシートを活用した住民からの要件聞
き取りと、それを元にした関係部署との連携、住民
向けに発行する広報の作成についてと、相談員支援
センターの活用について話がありました。山木屋地
区の避難指示解除に伴う川俣町原子力災害対策課の
戸別訪問事業の際に戸川相談員が作成した「ヒアリ

ングシート」を使って住民の情報を確認、月ごとにヒアリングシートを全部署に回覧することで、別部署の職員が同住民に重複した質問をすることが減り、住民の方の負担感を減らした合理的な情報収集を行っていること、年2回ほど行う情報交換会では保健師や社協の生活支援相談員等と情報共有をし、行政や行政外の関係機関における放射線への対応や避難等に起因する福祉問題に対応する取組を行っていること等、興味深いお話をいただきました。



その後のグループディスカッションではテーマ別にテーブルにつき、参加者同士がファシリテーターの進行のもと議論を行いました。テーマ①「相談員支援センターの活用方法、期待したいこと」のファシリテーターは福島県立医科大学の後藤あや先生、福島のエートス安東量子代表にお願いし、それぞれのテーブルのまとめからは「県内外への情報発信」「支援センターを活用したことのない自治体へ先行事例を紹介してほしい」といった意見がありました。テーマ②「好事例・失敗事例の共有」では福島県立医科大学黒田佑次郎先生と相馬中央病院坪倉正治副院長にお願いし、「キーワードは傾聴と信頼感構築」「相談者に対する向き合い方ひとつで信頼関係の構築が決まる」といった意見が出ました。最後にテーマ③「放射線相談対応手順・他部署との連携」は東京医療保健大学の福島芳子先生、元伊達市役所半澤隆宏氏にお願いし、「相談員は“話を聞くプロ”であるべき」「避難先自治体と避難元自治体の情報共有」「相談員の教育支援が欲しい」といった意見が出ました。同テーマでもテーブルごとに違いがあり、生きた話合いの場となっていました。

話が深まってくるにつれ身を乗り出して向かいの参加者と話合いをするような場面も見られ、今回の

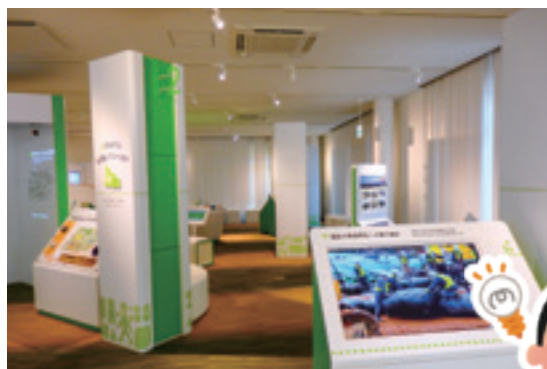


ワークショップは前回開催時以上に、内容の濃いものとなりました。

『リプルんふくしま』で 埋立処分場の仕組みを学びませんか？

富岡町にある既存の管理型処分場を活用し、放射性物質汚染対処特別措置法に基づいて放射性物質に汚染された廃棄物（10万 Bq/kg以下の特定廃棄物）等の埋立処分事業を国が責任を持って行っていますが、その埋立処分の内容や仕組みを直感的に体験できる情報館「リプルんふくしま」が富岡町の国道6号線沿いにオープンしました。

埋立処分がどのように行われているか、安全性をどう担保しているかを、最新のデジタルコンテンツによって視覚的、直感的に体感することができます。また、粘土で水を遮る等の模擬体験、モニタリングフィールドでは水質モニタリングエリアで採水した水で水質検査等のモニタリング体験も行っており、お子様でも科学者気分楽しんで学べるようになっています。



楽しいしかけがたくさん！



模擬体験や放射線の基礎知識の体験は予約の必要もなく10分程度で簡単に行えますし、フィールドワークでのモニタリング体験は毎月第2日曜日に1日2回行っています。また、特定廃棄物埋立処分施設の見学や団体利用、リプルンふくしま内の会議室も無料で利用でき、自治体や社協等で見学会等の活用もできます（特定廃棄物埋立処分施設の見学、団体見学、会議室の利用、モニタリング体験は予約が必要となります）。

支援センターでもリプルンふくしまを活用した研修等の企画を承れます。ご興味がございましたらお気軽にご連絡ください。

特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしま

- 住所：福島県双葉郡富岡町大字上郡山字太田 526-7
- 開館時間：9:00～17:00
- 入館料：無料
- 休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）・年末年始
- 電話：0240-23-7781

南相馬市車座意見交換会 「今が旬のもぎたて野菜を食べてみようツアー」



切ったキュウリをマリネリ容器につめるお手伝い

8/4、8/8の2日間、南相馬市原町生涯学習センターで小学生とその保護者を対象に「今が旬のもぎたて野菜を食べてみようツアー」と題した、夏野菜収穫体験および野菜に含まれる放射性物質を測定して学ぶ車座意見交換会を行いました。

まず市内の農家さんの畑でキュウリやトマトといった夏野菜を収穫し、その後、原町生涯学習センターの食品検査室に移動して収穫した野菜の放射性物質の測定の体験です。南相馬市市民生活部の石川

さんからゲルマニウム半導体検出器の測定の仕方等を教わりました。

次に、南相馬市健康福祉部の藤田さんから、日本と海外における食品の基準値の違い等を親子で学びました。

学習の後はいよいよサラダ作りです。収穫したばかりの新鮮な野菜のサラダはとてもおいしそう。地元産の食材も使って作ったカレーライスとともに、皆で出来たてを頂きました。



もぎたて野菜のサラダと
地元産食材のカレーライス、おいしそう！

参加した子どもたちの感想では「食品検査装置には破壊式と非破壊式があることを知った」「これまでより放射線について知ることができた」「日本の基準値が他国よりも低くて驚いた」といった声や、「体験でより理解が深まった」という感想、また一緒に参加した保護者からは「まだ不安はあるが放射線について親子で一緒に話せる機会ができて良かった」「親も勉強になり良かった。来年もやって欲しい」「実際に食品検査を行うところを見ることができて安心した」等のコメントがありました。親子で楽しく放射線について学び、夏休みの良い思い出にもなったようです。

放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより No.16

発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町2-6
いわきフコク生命ビル5F

フリーダイヤル：0120-478-100

FAX：0246-35-5158

E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

